

森 事務 ㍿

9/9(金)
(中に
連絡を

お目を通していただき、

よろいかどうか、連絡
ください。 

ハ本五五五。

十
年
初
頭
以
来
、
石
油
・
石
炭
政
策
の
カ
ジ
取
り
と
て、
国
際
情
勢
の
激
し
い
う
ね
り
の
中
で、
昭
和
三
十
三
年
屋
清
氏
ら
と
も
に、
い
わ
ば
国
の
参
謀
本
部
と
し
て、
エ
ネ
ル
ギ
ー
政
策
に
関
し
て
は、
有
澤
廣
巳
氏
、
土
議
会
の
中
核
と
し
て
活
躍
貢
献
さ
れ
た
が、
と
く
に
々
の
国
の
大
き
な
政
策
課
題
に
つ
い
て、
各
種
の
審
周
知
の
よ
う
に
圓
城
寺
さ
ん
は、
税
制
・
医
療
等

さらにはその実現方策に到るまで、きめ細
 かく汗を流された。また、昭和五十年代から
 は原子力、最近では新エネルギー、コンピ
 ューター産業について、同様に貢献をつづけ
 られた。つまり、同氏は国の基本を支える経
 済・食糧・エネルギー・医療問題等に、勇を
 嫌わず盡力されたのであるが、いずれの場合
 も、「上からの」政策というより、むしろ、
 つねに大衆の側——消費者、患者、労働者等
 々——からの視点をしっかりと据えておられた

（日本経済新聞社原稿用紙）

。やすかに、その御一生を、一貫して“社会
の木鐸”ジャーナリズムの道を歩まれた圓城
寺さんならびは、との感を深くする。
昭和四十八年、原子力産業会議の会長に有
澤廣己氏が就任されたとき、副会長の一人に
圓城寺さんを迎えたのが、原子力開発に直接
関与していた大塚きつかけとなった。昭和六
十一年からは会長代理、代行として当会議を
統括していた大塚きつかけ、有澤会長の逝去と
ともに

六十三年から平成四年迄会長として、内外に
きびしい問題をかかえる原子力界の指導につ
くして頂いた。

最近、原子力委員会の「新」長期計画が発
表されて話題を呼んでいるが、この「長計」
は同発当初からほぼ五年毎に策定されてきた
。その中三回長計、昭和五十二年のものは、
圓城寿さんが、当時の原子力委員長代理・井
上五郎氏の強い要請をうけて、長期計画専門
部会の部会長としてまとめられたものである。

当時米国では、民主党のカーター大統領が
 新たな核不拡散政策を掲げて登場し、それま
 び米政府が推奨していた。ポルトニウム利用を
 禁止しようとしていた。わが国では、ポルト
 ニウムを使用済燃料から抽出する試験施設の
 「東海再処理工場」が完成に近づいていたと
 きであり、一方、石油危機で原子力発電の拡
 大を求められながらも、原子力船「むつ」の
 放射線漏れや、発電炉の故障続出で意にまか
 せず、さらに、関係者間で漸く軌道に乗りは

肝心の課題には指針をはっきりと打ち出して
 へ、「民間再処理工場の着手へ」などと、
 将来の本命として、「天然ウランは1/3を南米輸入
 けれども、肝心のポイントとして「高速増殖炉が
 みるとたしかに歯切れの悪い箇所も散見する
 められたオマニ三回「長計」は、いま読み直して
 敏夫さんをはじめとする関係者の意見をまと
 混迷の真只中にあつた。そんな中で、土光
 めぐる意見の対立もあり、原子力界は大きな
 じめた国産動力炉へATRに対する評価を

ある。とくに南米のための所要資金を「十平
 旬に四兆円」と財政当局の暗黙の了解をとっ
 て、はじめて明示できたことも、圓城寺さん
 の御力あってのことであつた。
 いつも会議を主宰されるとき、圓城寺さん
 は自ら「あまり意見を現わにされず、そのお
 人柄でじつくりと参加者の意見を聞いてまと
 められるのが常であつた。しかし、原産のあ
 る会合へ政策会議で、原子力の高レベル放
 射性廃棄物対策の中々具体化しないことにフ

いて、各人がその障害を（やや言いわけがま
 ましく）並べたてていたとき、圓城寺さん如
 突然「原子力開発の締めくくりともいえるこ
 の問題に皆さんは本気で取り組む気があるのか
 とときびしい一声を放たれた。その結果、原
 産はごく非公式な「検討会」をつくり、メン
 バーには、田島英三氏、山本寛氏ら専門家か
 動員され、座長に私（向坊）が個人としてお
 引受けした。週一回のペリスという精力的な
 検討で一応の成案を得て、これは原産から原

子力委員会に提出された。高レベル廃棄物
 は、その処分の実行が数十年後のことである
 だけに、問題を先送りにしちたが、こ
 のようなことが契機となつて昨年官民合同で
 「高レベル廃棄物処分事業推進準備会」が設
 立され、社会の信頼醸成にも資つてある。
 原産では、毎年春「年次大会」を開催して
 いる。わが国の原子力発電開発の状況が諸外
 国に比し安定しているためか、年々参加者が

ふえ、海外からの二、三百名を含め、いまでは原子力の平和利用に関する世界最大の会議となつてゐるが、恒例で二日目の午餐会には、参加者も原子力議論からしばし解放され、日本文化について哲学、芸術等の第一人者の方に卓話をおねがいしてゐる。とくに、外国の方からは大会の目玉として好評を博してゐるが、圓城寺さんか会長であつた時は、東山魁夷、加山又造、平山郁夫さんという錚々たる大家から貴重なお話をうかかふことができ、

長。自ら芸術を受され、また、この分野で旧
 ソ連、中国との交流に格別の御功績のあった
 圓城亨さんならば、と原子カ寅係者も追憶
 を新長にしているところである。特に、中国
 は毎年の様に訪問されて古典的遺跡をわが国
 の内外に紹介され、中国での高い尊敬を受け
 ておられる。